総評２０２５年１０月分　杉本真維子

「緑青の硬貨水底から祈る」杢いう子（佐賀県）
水底で変色した、もの言わぬ硬貨がなまなましい。これはほんとうに硬貨なのか。普段当たり前に見ているのを懐疑し、凝視したくなる。

「自転車で踏んで蛇かもしれなくて」ムクロジ（群馬県）
「しれなくて」という未了のかたちに意味がある。それによって、気になりつつも通り過ぎるよりほかない日々や、蛇の長さまでが、余韻となって残る。

「雨粒の重みで／窓が唸る／机の上の鉛筆が／夢を見る」ささやき（埼玉県）
耳を澄まし、ものを凝視する。それだけで世界はこんなにも豊かになる。

「だれもみなおなじ方向／むいて泣く／映画館ではひとしく、無力」高祖　にたまこ（岡山県）
映画館というわかりやすい受動が、端正でうつくしい。無力であることの価値が正当に見直されている、とかんじられる。

「ニンゲンの／かわをかぶってみたものの／中身がはみ出てわらうモノノケ」にわ（栃木県）
「モノノケ」という文字そのものに笑い声がのっている。センスが光る。

「遺跡をゆく／浴室でしか／触らないところのほうが／多い身体で」小川　未夜子（石川県）
遺跡と身体の競合のようなものをかんじた。また、たしかにひとは自身の身体をおそらく一生知ることはない。その事実から宇宙や神が導きだされるのではないか。

「カーテンが風をにぎって放つとき／生命とおもう手のひらの熱」まちのあき（宮城県）
カーテンは生き物のような動きをする。狩野志歩の映像作品「情景」を思い出さずにはいられない。カーテンの熱がかすかに伝わってくるところが秀逸。

「海賊の手から手をゆく／宝石の傷に／溢れんばかりの祈り」彩燈　琴璃（東京都）
海賊もまた、事情を抱えている。祈りがあるぶんだけ事情もある。そのフェアなまなざしに示唆を受けた。

「指先で瞼に触れて眠らせる／夜通し起きて乾いた傘を」
傘を眠らせる指先がとてもやさしい。こういうやさしいものを人は持っている、ということが、深いなぐさめになる。

「動脈も静脈もない水だけが／張られてあった夜の洗面器」乃木　ひかり（新潟県）
みなが眠る夜の表面張力の美しさと陶然となる。

次回もお待ちしています。